

学校教育目標	視覚障がいのある児童生徒一人一人の自立と社会参加をめざし、教育的ニーズに応じた教育を行うとともに、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。 (ミッション) 自分らしく、一人一人が輝いて生きる力を育てる。(QOLの向上) (キーワード) 「ひらく」
--------	--

今年度の重点目標	①主体的な学びに向かう授業実践(専門性の向上) ②キャリア教育の推進 ③仲間と協力し、生活を工夫する児童生徒の育成 ④チームで取り組むセンター的機能の充実 ⑤児童生徒の健康と安全を守る教育の推進
----------	---

年 度 当 初						評価結果 ( 1 ) 月			
評価項目	部科・分掌	評価の具体項目	現状	(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評価基準	経過・達成状況	評価	次年度への方策
① 学習指導の充実及び専門性の向上	小中学部	○児童生徒の「主体的な学び」が実現できるよう、体験的活動、言語活動を積極的に学習に取り入れ、児童生徒の主体的に学ぶ力を養う。	○部科の教職員で児童生徒の実態を共通理解し関わる中で児童生徒の主体的に学ぶ姿が見られるようになってきたが、言語活動を通じての知識の定着や技能の習得が十分とは言えない。	○体験的活動や言語活動などを充実させることで児童生徒の主体的に学ぶ力が高まり、知識・技能の習得や人間関係作りにつながる力が身につけている。	○学部研究等を通して児童生徒の学習状況を共通理解して、学習の設定や支援や指導・評価方法についての改善を行う。 ○授業内容を以下の視点で充実させる。①児童生徒の興味関心を高める、②学習への見通しを持たせる、③言語を介して思考・判断・表現する場面を設ける、④児童生徒の振り返りの時間を持つ。 ○努めて体験的活動を取り入れる。	4つの視点について、児童生徒に自己評価アンケートを行うとともに、部科教職員で授業内容の充実について話し合い評価 A：児童生徒がとても充実したと回答し、全ての授業で主体的に学ぶ力を伸ばす取組がとても充実した。 B：児童生徒の回答と授業の取組の充実が5割以上。 C：児童生徒の回答と授業の取組の充実が5割未満。 D：児童生徒が充実しなかったと回答し、授業の取組ができていない。	○児童生徒2名へのアンケートでは、①②③の項目は良い評価だった。④は1名が「あまりしていない」とし、2名とも中間のアンケートと同じ回答だった。 ○児童生徒の学習状況の共通理解をした上で生徒につけたい力を具体的に確認した。授業研究会を持ち、授業の中でどのよう言語能力をつけていくのかを検討することができた。	B	○次年度は今年度の成果を小学部児童や他の生徒の授業にも取り入れ、これまで以上に言語活動や体験的活動を通して主体的に学ぶ力が高まるよう、支援・指導し実践を進めていく。
	普通科	○各生徒の実態や進路希望を共通理解して適切な目標設定と効果的な指導に努め、目標達成に向けた学習指導の充実を図る。	○進学をめざす生徒も入学し、在籍生徒数が増えた。就労に加え、進学に向けて各教科等の指導の充実を図る必要がある。	○授業担当者や進路指導主事と連携し、各生徒の実態や進路希望に合わせた組織的な指導を行っている。	○各教科等(準ずる教育、知的障がい)の指導の充実 ○縦(他部科)と横(教科等)の情報共有の機会の設定 ○学習の目標と評価について生徒と共有	連携に基づいた組織的な指導に対する評価 A：生徒の実態や進路希望に応じた学習指導の成果が十分見られる。 B：成果が見られるが、改善の余地がある。 C：取り組んでいるが、十分な成果が見られない。 D：取り組めていない、または成果が見られない。	○教科担当者同士の連携や進路指導主事との連携により、生徒の実態や進路希望に合わせた指導を行った結果、成果が見られはじめた。さらに、各教育課程の効果的な運用について教職員間での共通理解を深め、連携して取り組んでいく必要がある。	B	○各教育課程の特性に応じた効果的な指導について教科担当者を交えて検討する機会を設け、部科を超えて関係者で共通理解を図りながら連携して指導・支援を行っていく。
	保理専攻科	○生徒が主体的・対話的に学び、目標への見通しを持って粘り強く取り組むことをめざした授業改善。	○生徒は資格取得に向け、積極的に学習に取り組んでいる。昨年度の取組で、新学習指導要領の3つの観点ごとに「何ができるようになるか・何を学ぶか・どのように学ぶか」という生徒のめざす具体的な姿で考え、年間指導計画を整理している。	○教職員は、自ら進んで学び、目標達成に向けて取り組む生徒の姿を考えた授業改善に、部科全体として取り組んでいる。	○「何ができるようになるか・何を学ぶか・どのように学ぶか」という生徒のめざす具体的な姿を考えた年間指導計画に基づき、部科研究として各授業で実践し、指導の工夫・改善を行う。 ○生徒アンケートを行い、授業や指導の改善に活かす。	授業の工夫・改善に対して部科としての取組状況により評価 A：工夫改善の具体的な取組が進み、全員が取組を共有できている。 B：工夫改善の具体的な取組が進んだ。 C：工夫改善への方向性が決まった。 D：工夫改善への方向性が定まっていない。	○「思考・判断・表現」の評価基準について研究を重ねることで、全科目共通の基準を作成することができ、全科目での取り組みに広げつつある。	A	○各科目で実践し、課題や成果を共有することで授業改善に活かしていく。
	教務部	○学習指導要領等の周知を図るとともに、教育課程編成の中核を担う。	○高等部において新学習指導要領に沿った指導の実施とともに、進学に向けた教育課程の運用についてさらに検討を進める必要がある。	○新学習指導要領や進学に対応した高等部教育課程を編成する。	○教育課程委員会と部科会や教科担当者会で連携して教育課程を編成する。	高等部教育課程の改善状況による評価 A：進学に向けた教育課程が改善できた。 B：進学に向けた教育課程がだいたい改善できた。 C：進学に向けた教育課程の改善を検討中である。 D：進学に向けた教育課程の改善ができなかった。	○12月に申請し、承認待ちである。進学に向けた教育課程の編成ができ、どの進学先でも対応できるものとなった。	A	○準ずる教育課程については大学進学に向けて運用していく。重複教育課程については小中高の系統性や合わせた指導の検討を進めていく。
			○教科によっては連携が図れているが、全ての教科には至っていない。	○カリキュラム・マネジメントを推進し、教科等横断的な指導の充実を図る。	○普通教科カリキュラム・マネジメント検討会を実施し、指導計画の改善を図る。 ○理療科目は教科等横断的な視点を入れて指導計画を作成し、実施する。	職員アンケートによる評価 A：教科等横断的な指導ができた。 B：教科等横断的な指導がだいたいできた。 C：教科等横断的な指導があまりできなかった。 D：教科等横断的な指導ができなかった。	○普通教科においては検討会で年間単元配当表を作成し、関係の教職員全員が教科等横断的な指導を実施することができた。担当者同士の連携をさらに工夫する必要がある。 ○理療科目は教科等横断的な視点を入れて作成した指導計画をもとに、各自が実践に取り組んだ。	B	○年間単元配当表を活用して見通しを持って取り組んでいくとともに、各教科のねらいを共有し連携することで深い学びにつなげていく。

様式 2

① 学習指導の充実及び専門性の向上	教育研究部	○各教科・科目等での指導・支援の充実を図り、授業の工夫・改善に取り組む。	○現テーマでの研究2年目が終わり、実践研究が深まってきている。実践を通して児童生徒の新しい時代に必要となる資質・能力も伸びてきている。	○研究3年目として研究の成果と課題を整理するとともに、次年度への見通しを持っている。	○グループ研究会(年間9回) ○部科会(研究を兼ねる)(年間10回) ○年間3回の授業研究会の実施(部科ごとで1回) ○1回の全体報告会の実施 ○教職員の相互授業参観	職員アンケートにより、研究・授業改善について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A: 3分の2以上の職員 B: 半数以上3分の2未満の職員 C: 3分の1以上半数未満の職員 D: 3分の1未満の職員	○まとめの3年目の年として部科ごとに研究テーマにそって、計画的に研究に取り組むことができた。また実践を通して児童生徒の新しい時代に必要となる資質・能力も伸びてきた。	A	○最新の教育について、学習指導要領の改訂のポイントや国・県の動向を踏まえて研究に取り組む。
	教育研究部	○教職員が自ら研修を企画実施することで、視覚障がい教育の専門性の向上を図る。	○校内研修は動画で記録し、いつでも視聴できる体制が整ってきた。研修担当者は研修を担当することで専門性を深めることができてきた。さらなる専門性の向上に向けて、視覚障がい教育以外の研修の追加や他分掌との連携、外部講師の招聘などが必要である。	○視覚障がい教育の専門性に加え、他の分野についての専門性が向上している。	○昨年度のアンケートでの意見や要望を研修内容の改善に生かす。 ・視覚障がい教育に関する研修の内容の充実を図る。 ・視覚障がい教育以外の研修を増やす。他の専門性に関する研修(重複障がいや教育相談など)	職員アンケートにより、校内研修について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A: 3分の2以上の職員 B: 半数以上3分の2未満の職員 C: 3分の1以上半数未満の職員 D: 3分の1未満の職員	○校内研修(視覚障がい教育分野、視覚障がい教育以外の研修など)を行い、各分野の知識を深めることができた。昨年度のアンケートでの意見や要望を研修内容の改善に生かすことができた。	A	○来年度の校内研修の体制は、今年度の体制を引き継ぎ、他分掌と連携しながら進める。研修内容や回数、実施時期などについては、今年度のアンケートでの意見や要望を生かして改善する。
② キャリア教育の推進	普通科	○生徒が自己理解に基づいた適切な進路選択・決定ができるよう、教科等横断的な指導や進路相談を実施し、キャリア教育の充実を図る。	○産業現場等における実習等を通して自己理解を進め、目標をもって取り組む生徒が増えてきた。一方で、慣れない環境では十分に力が発揮できない課題が残っている。また、進学をめざす生徒についても自己理解と具体的な目標設定が必要である。	○生徒が教科等横断的にキャリアパスポートを活用し、進路に関する情報や指導、実習等を通して自己理解を進め、適切な進路選択・決定をしている。	○定期的な進路希望調査と進路に関する話し合いの実施 ○キャリアパスポートの教科等横断的な活用 ○産業現場等における実習の事前事後指導の充実	キャリアパスポートを活用した教科等横断的な進路指導に対する評価 A: 教科等横断的な進路指導の成果が十分見られる。 B: 成果が見られるが、改善の余地がある。 C: 取り組んでいるが、十分な成果が見られない。 D: 取り組めていない、または成果が見られない。	○キャリアパスポートを中核に、年間目標達成に向けて産業現場等における実習や進路学習等、生徒の実態に合わせて活用した。実習や進路希望調査を受けて進路指導主事と部科で課題を共有し、指導の方向性を協議してきた。担任を中心として教科等横断的に指導を行うことで、目標を意識して取り組み成長が見られる生徒もいる一方で、進路の方向性が定まらない生徒もいる。	B	○支援部と連携して作成中の「進路の手引き」を活用し、生徒が自己理解を深め、さらに具体的な目標設定ができるように指導・支援を行う。進路指導主事と部科で進捗状況を定期的に共有し、連携して取り組んでいく。
	保理専攻科	○進路目標の具体化につながる体験活動や進路情報の提供、充実。	○生徒は、現場実習や職場見学、進路情報などを通じて、自己の進路について考えているが、進路希望をより具体化することや希望する進路の実現に向けた活動に取り組む必要がある。	○2年生は自己の進路目標が定まりつつある。 ○3年生は進路が決定している。	○体験学習や見学の実施と丁寧な事前事後指導、生徒同士の報告会などによる個々のキャリア教育の充実を図る。	各学年の達成目標に対しての状況を総合的に評価 A: 様々な体験活動や進路情報をもとに進路目標の具体化、希望する進路の実現に向けた活動の明確化ができた。 B: だいたいできた。 C: あまりできなかった。 D: ほとんどできなかった。	○感染予防対策のため、多くの行事や活動に大きな制限があった。臨床実習で外来患者への施術が実施できたのは非常に少なかったが、校内職員に施術する等、生徒の希望する進路目標や実現に向けて活動内容を工夫し実践できるよう努めた。	B	○生徒の技術向上・進路決定につながる様々な実習活動について、実践的な体験活動の積み重ねが重要であるため、コロナ感染症の状況を見ながらも、内容を工夫し、できるだけ実習活動が実践できるようにした。 ○進路情報について引き続き情報提供を行っていく。
	寮務部	○卒業後を見据え、社会参加・自立した生活を送れるように主体性を育てる。	○保護者、保証人、鳥取盲学校各教科・鳥取聾学校との連携が円滑に取れつつある。更なる連携の強化を図り、共通認識し一貫して取り組み、舎生一人一人の主体性を育成することが課題である。	○卒業後を見据え、個別の教育支援計画の目標を達成し、舎生一人一人の主体的な行動が増えている。	○個別の教育支援計画をもとに、舎生一人一人の障がい特性を理解し、社会自立へ向けてスモールステップで指導支援を行う。 ○舎生に寄り添い、保護者保証人、部科との連携を密にすることで、情報を共有し、舎生の主体性を育むための生活指導・支援をチームとして一丸となり取り組む。	保護者・保証人、学部と連携し、個々の課題を共有し、スモールステップで実践することで、舎生の主体的な行動が A: 全員増えた。(9人) B: 8割以上増えた。(8人) C: 6割以上増えた。(6人) D: 4割以上増えた。(4人)	○舎生一人一人の個別の教育支援計画を意識し、視覚的に情報提示したり、チェック表を活用して意識化を図ったり、対話し本人と確認して取り組んだりする等、スモールステップで場を捉えて繰り返し指導支援することで、舎生自身の主体的な行動が増えた。(全員達成) ○保護者との連携を軸に寮務部職員、盲聾学校関係者(管理職、担任)や外部専門家と積極的に情報共有することに努め、同じ方向性で一貫した取り組みができた。	A	○次年度も舎生一人ひとりに応じた指導支援を積み重ねるとともに保護者、寮務部職員、盲聾学校関係者(管理職、担任)や外部専門家との連携を取り、舎生一人ひとりの主体性を育成するよう継続して取り組む。

様式 2

② キャリア教育の推進	支援部	○自立と社会参加に必要な力を身につけられるようにキャリア教育の充実を図る。	○実習における真剣な取組の姿勢が高い評価を得ている。一方で自己理解を深め、将来設計を具体化し、課題解決の力を高めていく必要がある。	○児童生徒がキャリア教育学習プログラムを意識し、キャリアパスポートの目標達成をめざして学習に主体的に取り組んでいる。	○進路学習や実習の目標設定にキャリアパスポートの活用を推進したり、キャリアパスポートの目標を教室掲示したりする。 ○児童生徒が進路学習や実習における自分自身の評価を把握できるように報告会や振り返りの学習を設定する。 ○進路学習に関する廊下等掲示板の充実を図る。	児童生徒の取り組みをアンケートによって評価 A：キャリア教育学習プログラムの目標の達成率が100%である。 B：達成率が8割以上である。 C：達成率が6割以上である。 D：達成率が4割以上である。	○「先輩に学ぶ」の講師を小中学部及び普通科、専攻科それぞれに招き、働くことの意味や学校で学ぶべきことについて話を聞き、将来設計や課題解決の方法について考えを深めることができた。	B	○児童生徒がキャリア教育の意義を理解し、見通しを持って学習に取り組めるように作成中の「進路の手引き」の活用と内容の見直しを行う。
③ 仲間と協力する児童の育成	指導部	○集団や社会の一員として、つながりを大切にしながら、児童生徒会活動に参加することができる。	○児童生徒の年代は小学校中学年から40代までと幅広いが、行事を通してつながることができる。 ○年代、障がいの状況が様々で、自己理解や他者への理解についても個人差がある。	○児童生徒が、仲間を思いやりながら行事を運営したり、参加したりしている。	○児童生徒会行事では、児童生徒の思いや希望を取り入れながら計画を立てる。 ○行事担当の児童生徒を中心に、それぞれが役割を果たせるよう、活動場面を設定する。	児童生徒会行事後に児童生徒と教職員にアンケートを取り、その結果を基に指導部で評価 A：すべての児童生徒会行事で、児童生徒の思いや希望が取り入れられ、役割が果たせる場面が設定された。 B：8割程度設定された。 C：6割程度設定された。 D：4割以下しか設定されなかった。	○全児童生徒へのアンケートでは、全員がAまたはBと回答しており、ほとんどの行事で児童生徒の思いや希望を取り入れられたと考える。行事を計画、担当することにより、友だちの得意な面や良いところを発見する姿も見られた。	A	○児童生徒の生活年齢や発達年齢に応じて、行事の企画や運営をする機会を今後も設定し、主体性や積極性を育てていく。
④ センターの機能の充実	総務部	○ホームページを活用した情報発信を充実する。	○それぞれの担当者が随時ホームページを更新しており、新しい情報を発信している。学校全体として内容整理をしていくことが必要。	○ホームページ更新計画に沿って、本校教育について広く情報発信をしている。	○情報発信の内容を精査したうえで、各学部科・分掌で掲載予定を計画し、最新の学校生活の様子を公開する。 ○誰にとっても分かりやすいホームページとなるよう構成等を改善していく。	本校教育についての発信状況で評価 A：ホームページ計画以上に発信できた。 B：ホームページ計画に沿って情報発信できた。 C：情報発信したが、計画通りにはできなかった。 D：あまり情報発信できなかった。	○内容は計画通りではないこともあったが、各学部科・分掌で内容を工夫し、最新の情報を公開している。 ○職員用の更新マニュアルを作成するとともに、ホームページのデザインや構成等の工夫を重ね、改善している。	A	○教科の学習等、各学部科・分掌以外の情報についても担当者を明確にして計画を作成し、学校の様子をわかりやすく発信していく。
	支援部	○積極的に情報発信して、視覚障がい理解啓発、指導支援を充実、推進する。	○感染防止対策をしながらねらいに応じた研修や教育相談を実施している。 ○視覚障がい理解を深めるための資料を順次ホームページに掲載している。 ○夏と冬に見えにくさのある児童生徒と本校小中学部とのふれあい交流会を実施している。	○校内の人材を活用し、見え方等に応じた支援を考へ、積極的に情報発信をして多様なニーズに応じて支援を推進する。	○弱視特別支援学級8校と盲学校をオンラインでつなぎ、タイムリーでニーズに寄り添った支援ができるようにする。 ○ホームページの視覚障がい理解の部分を、最新の情報になるよう定期的に更新する。 ○事例検討を行い、見えにくさへのよりよい対応・支援方法を模索する。	A：校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援活動を推進しながら毎月定期的にホームページやおたよりで視覚障がいの情報発信をした。 B：校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援活動を推進しながら学期に2回以上は情報発信をした。 C：ニーズに応じた支援活動を推進しながら学期に1回情報発信をした。 D：ニーズに応じた支援活動を推進しながら年2回は情報発信をした。	○おたよりやホームページでの情報提供・公開を学期に2回おこなった。 ○依頼に応じ、教育相談や視覚障がい理解学習等をすすめた。親子教室を継続的に実施した。 ○夏と冬に本校を会場に県内特別支援学級等とのふれあい交流会が実施できた。	B	○毎月、定期的にホームページやおたよりで情報発信が実施できるよう、発信内容をあらかじめ決めておく。 ○事例検討の回数を増やし、より質の高い支援が行えるようにする。
⑤ 児童生徒の健康と安全を守る	指導部	○感染症予防の対策がとられ、児童生徒が安心安全に学校生活を送ることができる。	○新型コロナウイルス感染症の流行により、学校生活の様々な場面で感染症予防対策に取り組んだり、個々の予防行動の実践が必要となっていたりしている。	○児童生徒が感染症予防に関し、安心感をもって学校生活を送るとともに、自らすすんで感染予防対策を実践している。	○学校生活の様々な場面で状況に応じた感染症予防対策を行う。 ○児童生徒が、自らすすんで感染防止のための一般的な予防行動についての情報発信を行う。	児童生徒アンケートで評価「学校生活の様々な場面で状況に応じた感染症対策の取組、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動ができていくか。」 A：十分できている B：概ねできている C：あまりできていない。 D：ほとんどできていない	○全児童生徒へのアンケートでは、各々が年度当初に決めた自己目標に対する評価は、A:7名、B:3名、C:1名であった。自己目標についての声かけが十分にできず、達成が不十分だったと感じている生徒もいるものの、日常的なマスク着用やアルコール消毒、換気については意識できており、学校全体としては概ね感染症予防対策が浸透し取り組んでいる姿がみられる。	B	○感染症予防対策をしながらの学校生活も長期間となっているため、意識を継続していけるよう1年に1回の自己目標の見直しと毎日の健康観察でのふりかえりを今後も実施していきたい。

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し

【100%】 【80%程度】 【60%程度】 【40%程度】 【30%以下】